

自己否定を目指す研究者

廣 瀬 公 治

テレビゲームに興じる息子を見ていると、自分が負けそうになったらリセットボタンを押してまた初めからやり直していることがある。ところで、先日パソコンのディスプレイが映らなくなったので修理を依頼したら、新品を買うより高い修理費用がかかると言われ新品を購入した。すなわち、代替品による現状回復である。この二つの事例を見ると、なぜゲームで負けそうになったのか、またどこが不具合で故障したのかを解析するプロセスはゼロである。ゲームやモノの世界ではそれで済むが、こと人間の体ではリセットというわけにはいかない。であるから、多くの先達によって成し遂げられた医学研究は、まさにこのプロセスを解き明かすものであった。余談であるが、最近の若者は与えられた問題に対して即座に答えを要求し、その問題解決までのプロセスを省こうとする傾向があるように思うのだが如何であろうか。

さて、ここで述べた話の始点は「不具合」であり終点は「回復」である。これを人間に例えれば始点は「疾病」で終点は「治癒」に置き換えられる。そして、これまで行われてきた多くの歯科医学研究は、どのようなプロセスで疾病になり、どうすれば効果的な治療ができるかを考えることが主であった。すなわち疾病が主役となるDisease Oriented Conceptである。

一方、国民の健康志向の高まりと高齢社会の進展に伴い、第1次予防の重要性が増している。第1次予防の主眼は「疾病の予防」であり、そこには健康増進という項目がある。すなわち健康が主役となるHealth Oriented Conceptという概念が台頭してきた。そして、これに呼応するかのように齶蝕や歯周疾患を予防するための方策を検討した研究報告が数多く出されるようになった。すなわち、始点を「健康」として、終点は終わりのなき健康を指向する研究である。しかし、歯科疾患予防の研究は、齶蝕や歯周疾患を予防することは考えても、これらを根絶することまで考えてはいない。その昔、ジェンナーが種痘を見い出し、一時的にせよ地球上から天然痘を駆逐した。遺伝子組換えで作られたB型肝炎ワクチンは着実にHBVキャリアーを減少させ、やがて先進諸国からHBVが消えるだろう。そして現在の人類の問題であるHIVやガンをターゲットとしている研究者が考えている真の研究のゴールはHIV感染症やガンそのものの根絶ではないだろうか。

ところで、HIV感染症やガンを悪人とし、研究者を警察のような実力組織とする。悪人がいなければ実力組織は不要である。しかし警察は日々防犯活動をして、自分たちの出番が来ないような状況を作り出そうとしている。これと同じようにHIV感染症やガンがこの世から無くなれば、それを研究している者は失業する。すなわちこれら研究者は

日々一生懸命、自分の存在価値を消失させる、すなわち自己否定を目指す仕事を行っているのである。

これまでの歯科医学に関する研究を見てみると、齲蝕・歯周疾患の病因に関するものや歯科治療分野の研究は長足の進歩を遂げた。しかし、口腔2大疾患である齲蝕と歯周病の予防に関する研究はミクロレベルでは大きな進展があったものの、目に見える形でフィードバックされたものはブラッシング法やシーラント、あるいはフッ化物応用程度で、この2大疾患を根絶するまでに結びつく研究は皆無である。齲蝕も歯周疾患も感染症であり、その原因微生物もほぼ特定されていることから、根絶とまでは言わなくとも予防は簡単そうである。しかし、そうではないことを十分皆知っている。なぜならば、齲蝕や歯周疾患の発症には生活習慣や保健行動などの環境要因が大きなインパクトを持ち、感染症を論ずるときの純粋な生物体としての宿主と寄生体との関係だけでは説明できないからである。AIDSも原因が判っているのに感染拡大が止まらないのと同じである。よって齲蝕や歯周疾患を制圧するにはラボの中で完結した研究だけでは不可能であり、フィールドワークの成果が絶対に必要である。このことから、今後の歯科医学研究には社会科学的な発想をより多く取り入れなければならないと思う。

さて、もうすぐお正月である。お正月の定番としておせち料理がある。重箱にきれいに盛り込まれた様々な食材が一体となって「おせち」を構成している。中央に存在感ある伊勢海老があるかと思えば、隅のほうで小さくなっている千代呂木がある。しかしどれをとっても無駄なものは無い。逆にどれかひとつ欠けても「おせち」を構成しなくなる。口腔疾患の制圧という成果が重箱に盛り込まれた「おせち」とする。NatureやEMBO, Cellなど伊勢海老クラスの論文が一の重を飾ったとしても、二の重、三の重がなければ「おせち」にはならない。玉石混合の論文が二の重、三の重を埋めるのである。そして、お重を埋める論文にインパクトファクターがあろうが、ワカサギの田作りの串のような目立たない存在の論文であろうが無駄な論文は一切無い。

何のために研究するのか、との問いに歯科医学研究者であれば「自己否定」はひとつの答えである。口腔疾患の制圧を目指し、千代呂木でも田作りの串でもいいから重箱を埋めることが出来るものを生産して行きたいと考えている。

(奥羽大学歯学部口腔衛生学講座)